

## かな先習の諸弊害

かな先習に依る弊害はまだまだ沢山あります。例へば、小学校低学年の指導で先生方が悩まされる問題に、次のやうなものがあります。

(一)漢字に不要なかなを付け加へる誤り。

例＝川わ、月き、雨め。

(二)漢字を表音文字のやうに使ふ誤り。

例＝木しゃ(汽車)が木(来)た。

このやうな誤った使ひ方は、最初から漢字表記で学習した子供たちは決して犯すものではありません。然しながら、最初かな表記で学習する子供たちにとっては、これは実に犯し易い誤りであって、その上、矯正しようと努力してもなかなか正すことが出来ないものです。

かな表記は一音一字が原則ですから、すべての言葉を一音一字といふ形で表記する習慣が身に着いてしまふものですから、“川”だけでは「川のか」だけにしか当たらないやうな気がして、“川わ”と書かないと心が落ち着かないのでは無いかと思はれます。

これよりももっと困るのが「木しゃが木ました」と書く誤りです。これは「漢字の表意性をよく説明してやって理解させれば改まるはずである」と思はれるでせうが、事はそれほど簡単なものではないのです。

例へば、「積木の汽車」を「つみ木の木しゃ」と書いた子供がゐたとしませう。その子に対して「“つみ木”は正しいが、“木しゃ”は誤りである」といふ事を、どう説明したら子供に納得させることが出来るでせう。

“つみ木”が正しいなら、“木しゃ”だって正しい、と考へるのが自然です。最初から“汽車”と教へさへすれば問題は起らないのです。さうすれば、汽は蒸気を表した字で、蒸気で走る車だから“汽車”と書く。“木車”は誤りだと直に理解できます。然し、“汽”といふ字を学習してゐない子供にはとても理解させることは出来ません。

また、“学校”といふ漢字を学習した子供たちは、校舎を“校しゃ”と書き、講堂を“校どう”と書くに違ひありません。その場合「“校しゃ”は正しいが、“校どう”は誤りである」といふ事を、どう説明してやったら子供に納得させてやることが出来るでせう。

これも最初“講堂”と教へて置けば、何の問題も起らないのです。“講堂”を知らない子供が“学校”を学習すれば、“校どう”と書くのは自然の道理です。これを誤りとしたら、“校”と書くべき所でも“こう”と書くやうになってしまふでせう。

このやうに、教師にとっては説明することが出来ず、子供にとっては実に理解し難い誤りが続々と出て来るのですから、教師も子供もたまたまのものではありません。また、このやうな学習が楽しいはずが無く、全く無益の学習といふ外はありません。